

# 一握の砂

## 映画文学人生論

石川啄木 (1927-1997)

『一握の砂』『悲しき玩具』1976) 「青樹社」

『あこがれ』(1994) 「文藝春秋社」

『雲は天才である』 (1959) 「講談社」

『時代閉塞の現状』(2002)

少年にして早う名を成すは禍なりと云へど

明治の文学で二十一世紀の日本人にも感動が伝わってくる作品は何だろう。尾崎紅葉の『金色夜叉』？ 夏目漱石の『坊っちゃん』？ 樋口一葉の『たけくらべ』？

石川啄木の『一握の砂』だと私は思う。なかでもふだん読書もしない庶民にもよく知られている短歌がある。

はたらけど

はたらけど猶わが生活楽にならざり

じっと手を見る

である。可哀想にと同情する読者や哀れな奴とさげすむ読者もいるが、同じような生活（くらし）を経験したことのある下積の人々にとっては実感そのものである。庶民の生活感情に素直に訴えかけてくる名作にちがいない。

また、流離漂泊を経験したことのある地方出身者、故郷喪失者の心に強くひびく短歌もある。

ふるさとの山に向ひて

言ふことなし

ふるさとの山はありがたきかな

石をもて追はるるごとく

ふるさとを出でしかなしみ

消ゆる時なし



# 一握の砂

映画文学人生論

啄木は渋谷村の禅寺宝徳寺で育ち、神童とうたわれた。

そのかみの神童の名の

かなしきよ

ふるさとに来て泣くはそのこと

しかし、文学に熱中するあまり、学業不振におちいり、盛岡中学五年生の秋、中途退学した。卒業をあと半年に控えたところだった。

十七歳の啄木は、文学で身を立てるために上京し、与謝野鉄幹の新詩社を訪れた。そして、二十歳で詩集『あこがれ』を上梓する。鉄幹はその詩集に跋をよせ、「少年にして早う名を成すは禍なりと云へど、しら髪かきたれて身はさらばひながら、あるかとも問はざれる生きがひなさにくらぶれば、猶、人と生れて有らまほしくはええしきわざなりかし」と紹介した。

啄木は詩集『あこがれ』のほかに、小説『雲は天才である』、評論『時代閉塞の現状』などの作品もよく知られているが、彼が天才として本領を發揮しているのは『一握の砂』と『悲しき玩具』の短歌である。

頬（ほ）につたふ

なみだのごはず

一握の砂を示しし人を忘れず